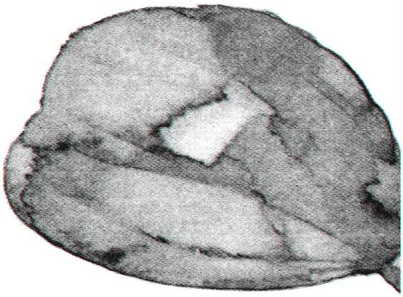
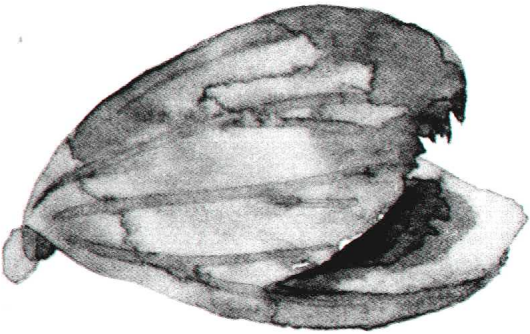


隠れた女

澤野久雄



講談社

隠れた女

昭和三十九年十月十日　第一刷発行
著　者　澤野久雄
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
振　替　東京三九三〇
電　話　東京(942)一一一一（大代表）
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
著者の了解により検印廃止
©澤野久雄一九六四
定価　三九〇円

隠れた女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どうして、また

佐倉佐織が不意に足を止めたのは、男がまた、「あの顔」をしていたからである。

たとえ、その男が歩いているのを見かけても、いつも店先で見馴れている顔だったら、彼女は知らぬふりをしてやりすごしてしまったかもしれない。

十二月の夜、七時。銀座は一番明るい時刻であった。寒さは沁みるようだったが、――いや、寒さが厳しければ厳しいだけ、店の灯ははなやぐようである。どちらを向いても、クリスマスの飾りつけは美しかった。ヒマラヤ杉は、ショオ・ウィンドウの中で雪をかぶっていた。銀の星が、光っている。紅や青のモールが、からみ合っている。そして、音楽は辻々にあふれていた。

一日の仕事を終った男たちは、どこかでハイボールでも飲みたいと思っているだろう。久しぶりに買物に出て来た人妻は、いっ時も早く、暖かい家庭に戻ろうとしていることであろう。若者が、腕をくんで過ぎる。少女たちは明るい笑い声をふりまいてゆく。銀座の雑踏の中には、仕事をはなれている人の解放感と、十二月のあわただしさとが、水のようにもつれ合って流れていた。

佐倉佐織は、大きな靴屋の店を出たところであった。右手に、靴の箱を入れた紙の袋を下げていた。といって、新しい靴を買ったわけではない。修理に出して置いた靴を、受取りに来たところだった。直して見ると、まだ結構きれいである。

――よかったわ。明日から靴が一足、ふえたようなものだわ。

二十二歳である。働いて、暮している女であった。たまにはちがった靴を穿いて出たいと思うのも、無理のない年ごろだった。通りかかった店先で、あらきれい、と、飾られているオーヴァや毛皮に、目を奪われることもないとは言えない。しかし、決しておしゃれなのではなかった。おしゃれをするだけの余裕はないわ、というのが、いつもの彼女の言い分である。

いまも、黒のオーヴァに黒のハンドバッグだった。今年は黒が流行だそうだが、彼女はそれに習ったわけではない。オーヴァは前の年に作ったものだ。ハンドバッグの黒は、平凡な好みにすぎない。

彼女は、そのハンドバッグを左手にかかえ、右手で靴の袋をさげていた。そこから、僅かばかり新橋の方へ歩き、すぐにバスに乗る積りだった。余り、おそくなってはいけない。そのまま帰っても、家へ着けば八時に近くなるはずだった。だから店を出ると、急いで人びとの間を縫いはじめようとしたのだが、僅か二、三歩ふみ出した辺りで、彼女は思わず足をとめたのだった。

「青沼さん……。」

佐織は声をあげた。いや、彼女の意志にかかわりなく、声だけが走ったような具合であった。

青沼俊三は人の流れの向う岸、ちょうど鋪道の外れを、四丁目の方から歩いて来ていた。酔っているのだろうか？　ふと彼女がそう思ったのは、青沼が「あの顔」をしていたからである。しかし、決して色に出ているわけではない。寒さのためか、広い額がいくらか蒼ざめて、目は遠い所を見ている。傍をすれちがう人の中に誰がいても、彼は決して気がつかないだろう。足はいくらか、もつれるように見える。それでいて、人につき当りそうになると、まるで魚のように柔軟に、その肩先を避けて通った。

――酔っていらっしゃるのでは、ないわ。

酔っていると思えば、黙ってやりすごしたであろう。が、彼女はあわてて、人ごみの間を縫っていた。縫いながら、

「青沼さん……。」

男は、漸く立ち止った。ふり返った。無表情な顔である。佐織を見ても、意識はまるでそこまで届いて来ないようであった。

「どうなさいましたの？　そんな……。」

やっと人の流れを横切って、鋪道の端で向い合った。が、僅かな間があった。僅かな間を、冷い風が吹きぬけて行った。

「やあ……。」

相手がそう言うのが、もう一瞬おそかったら、彼女は男に背を向けていたかもしれない。

「君だったのか。」
男のそのひとことで、佐織は不気味な沈黙から逃れることが出来た。しかし、不気味なもののあとからは、堪えがたい羞恥が襲って来ていた。
――声をかけるなんて、失礼ではなかったかしら？こんなに人の多い中で向い合っていては、御迷惑じゃないのかしら？
――この人が悪いんだわ。また、あんな顔をして歩いているから……。
佐織は急いで、さっき見た男の顔を思い起そうとした。が、目の前にあるのは、もういつものやさしい表情だった。大人がよく、子供に見せる表情である。
――それも無理もないわ。この人、あたしよりひとまわり以上も上にちがいないから……。
あるいは、四十歳にも近いのではないか。整った身装をしている。軽そうな茶のオーヴァの襟から、グレイのカッターが見えていた。
「失礼しましたわ。」
と、彼女は低い、元気のない声で言った。
「どうして……？」
「だって、こんな町なかで声をおかけしたりして……。」
「そんな遠慮はいらないじゃないの。折角、会ったんだ。何か、御馳走でもしようか？」
「いいえ、いいんです。さっき、変な顔をしていらしったから……。」
「変な顔」という形容は、余り粗雑にすぎるだろう、と、彼女は思った。けれども、急には別の言葉が浮かばない。いいわ、仕方がないわ、と、自分を納得させながら、
「つい心配になって、お呼びしちゃったんです。」
そう言えば彼女は、今日まで街なかで青沼に声をかけたことなどなかった。勤め先が互いに近かったから、行き会うことはよくある。が、もし目が合っても、丁寧にお辞儀をして、行きすぎるだけだった。
もともと、佐織のつとめている店の、一人の顧客というにすぎない。
「至文堂」というのが、その書店の名前である。銀座の表通りに面した大きなビルの二階にあって、これだ

けの売場面積を持った書籍店は、銀座にも二つとはない。いや、東京じゅう探しても、何軒もないのではないか。

彼女はいつも、その店の美術関係書の売場に立っている。服の上に鶯色の事務服を羽織って、穿いているのは大抵サンダルだった。

洋書の売場はそんなには混み合わないが、この売場もそう忙しい方ではない。隣りの文学書の売場はいつも人が群れていて、学生や若い娘たちの中には、何十分も立ち読みをしている人がいた。時々、その混み合った売場の中から、すいっと人の群をはなれて、こちらの売場に移って来る客がいる。青沼もそういう客の一人だったから、随分前から顔は知っていた。

大抵、店の包装紙でつつんだ本をかかえているから、いいお顧客さんにはちがいない。が、こちらの売場の本は、眺めるだけで滅多に買わない。滅多に、——というよりは、多くは、と言い直す方が正しいだろうか。

「なにしろ美術書は値が高いから……。」

同じ売場にいる戸島雪枝がそう言ったことがある。美術書の中では、画集に一番人気があるが、それがまた最も高価なのである。印刷が鮮明で、色がよく出ていて、——客たちの喜びそうな品になると、学生や若いサラリーマンには、なかなか手が出せない。

何日か通って来てとみこう見し、漸く買って帰る人を見ると、店員たちはよく、

「嬉しそうだわね、あの人……。」

と、囁くことがあった。

青沼はそれでも、何度か佐織の売場の本を買った。時々は、新聞広告で見た本の名を口にして、

「あの本、来ている……？」

佐織が、その本のある棚を示すと、

「悪いけど、ちょっと見せてね。」

そういう時は、齢に似合わず羞かしそうな表情になった。そして、二、三分、ちらちらと頁をかえして見て、ありがとう、と、もとの場所に納めて帰る。

至文堂には、この男の顔を知っている女の子は多い。かなり、好意の目で見られている男だ。この頃では、通路を歩くこの男の目が、ちらとこちらに流れると、佐織は丁寧にお辞儀をする。男が何か訊きでもし

ない限り、彼女の方からは口をきかないが、つまりそのくらいの知り合いなのである。
——声をかけるのは、出すぎていた。
と思ったから、御馳走でもしようかと言われると困ったが、
「あなたももう、用事はすんだの？　それなら少し、一緒に歩こうか？」
そう言われれば、振り切れなかった。
肩をならべて、雑踏の中へまぎれこんだ。いや、人波はその中に入って見ると、一層はげしかった。肩と肩とが当る。腕がふれ合う。
「ひどい人だな。」
という男の声は、気がつくともう、少し先の方になっていた。
「どこまで、お帰り……？」
「杉並です。」
「やあ、それは大変だ。」
「青沼さんは……？」
「僕は、多摩川の方……。」
男がななめに、ふり返るようにして喋る。急いでついてゆきながら、
——少し、お痩せになったわ。
と、佐織は男の頬を見た。
「もう、まっすぐお帰りになりますの？」
「さあ、どうしようかと思って……。」
「お酒でも、あがりたいんじゃありません？」
「いや。」
と、男は笑って、
「そりゃ、飲んでもいいが、君もつき合う？」
「とんでもないわ。」
——意外に大胆な人だわ。
と、佐織は思った。
顔は、前から知っている。口も、きいている。が、肩をならべて歩くのは、今日がはじめてである。それを、いきなり酒に誘うとは、——と思ったが、酒という字を口にしたのは、佐織の方が先であった。
「さっき、辛そうな顔をしてらしったわ。どこか、お悪かったんじゃなくて？」
それならあなたも、止めた方がいい、と言おうとしたのだが、相手は彼女の言葉に、なんの反応も示さな

かった。また肩が離れたから、聞えなかったのかもしれない。そのまま十メートルほど行って、
「曲りましょう。余り人が多すぎる。」
男は洋装店の角から、すばやく御幸通りに入った。
佐織は二、三歩、足ばやに追いついて、
「どこへいらっしゃる？」
「遅くなったら、御両親に叱られる？」
「あら、あたし、親なんかいませんわ。」
「おや……。」
男のふり返った顔が、不意に堅いようだった。
「どうして……？」
「捨子ですもの、あたし……。」
そう言って、くすっと、笑った。
「うそ、言ってら……。」
佐織はもう、笑ったまま答えなかった。相手の顔も見なかった。男がなんと言うかと、耳だけをそば立てた。
本当なら、可哀そうだ、というところだろうか。どこで拾われた、と聞くだろうか。しかし洋品屋の前を通り、また靴屋の角を通りすぎても、男は何も言わなかった。やがて、並木通りを左に折れる。小暗い道だ。
――でたらめを言ってると思って、怒ったのだろうか？
佐織は漸く気になって、男の顔をふり仰ぐように見た。その途端に、彼女は、あッ！ と言いそうになった。また「あの顔」になっていたからだ。灯の少い、小暗い道でも、かげっている男の顔は分った。
彼女がふり仰いだことに、男は気づいたのだろうか。佐織の顔は見返しもせずに言った。
「本当なら、うらやましい。どんな犠牲を払っても、代ってもらいたいもんだ。」
怒っているような、けれども深い声であった。

小暗い道では、落葉が湿っていた。
いや、プラタナスの落葉は、暗やみの中でだけ湿ってゆくわけではあるまい。しかし道の両側には小さなビルがあったり、商社があったりした。店鋪は少かったし、中には鉄扉を閉めているものもあったりするから、目に触れるものは少い。すると、神経が体のすみずみまで、隈なくゆき渡るのだった。明るいはなやか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な道をゆく時など、誰も足許などに気はとられないであろう。
「おかしな方……。」
電気器具商のショオ・ウィンドウには、水銀燈の燈籠がかざられていた。
「あら、おかしなものは、方々にありますわ。」
佐織は、その燈籠に目を投げながら、
「似合わないわ。」
古めかしい燈籠と新しい光線との、不調和を言ったつもりだったが、
「そう、僕がこんなことを言っては、似合わない？」
「あらまた、話が喰いちがって……。そりゃ、あたしと境遇をとりかえたいなんて仰有るの、やっぱりおかしいけれど……。」
しかし彼女の中にも、かすかな喰いちがいは起って来ているのだった。
今までの経験では、一人ぼっちだと言えば、誰もが大抵同情してくれた。同情してもらいたいとは、今では少しも思わなくなっていたが、人びとの彼女に対する同情の仕方に、興味をひかれる部分もあっただろうか。口先だけで哀れみながら、少しも姿勢を崩さない人、全身で、倒れかかるように心を傾けてくれる人、あるいは肩も動かさない人。様々だった。似ていると思っても、それぞれに微妙なニュアンスのちがいはあった。
「甘ったれちゃ、いけないね。」
と、こわい顔で言った人もあったが、あれは誰だったろうか。しかし、羨しいと言った人はない。
世間には、煩雑な家族関係というものが、かなり多いのかもしれない。子供が多すぎて、もう少し小人数であったら助かったのに、という人もいた。兄妹が多すぎて、うるさいという人もいる。嫁と姑の問題に限らず、家族関係というものは、わずらわしいものだと聞いている。しかし、完全に一人でありたいと言うのを聞くのは、佐織の経験ではじめてであった。捨子の身がうらやましいとは、なんということを口にする人だろうか。
――案外、逆説的な同情の仕方なのだろうか？
その逆説が佐織に分るかと気づかって、柔らいでいた男の顔が、不意に「あの顔」になったのではない

か。すると、あの顔の現れる時は？
前にも、青沼のその顔を見たことがあると思ったが、何時のことだったか思い出せなかった。
鋪道のきわで、屋台のおでんやの暖簾が、ひらひらとゆれていた。通りすぎようとすると、濃い煮汁の匂いが、鼻を打った。まだ梢に残っていたらしいプラタナスの枯葉が一枚、ゆっくりと降って来て足先に暗い影を作った。
——寒いわ。
と思ったのは、温い湯気が、屋台から流れると気づいたからだろうか。あるいはいままで二人の間で交わされて来た会話の内容が、ひえびえと彼女を包むのだろうか。
——愛する人がいれば、向い合って食事をしたい。仄々と、心をあたためたい。
ふと、そう思った。その時だった。
「君のところの戸島という人、あれ、どういう人……？」
突然、青沼が低い声で言った。
佐織は吃驚したように、また男の顔をふり仰いで、
「なんでまた急に、戸島さんの名が……？」
今度は、話の脈絡がつかめなかった。
三十歳に近いだろうか。いつも着物を着ている人だ。佐織にはやさしい先輩だった。しかし、どこかが古めかしい。着物ばかり着ているから、というのではなかった。言葉づかいも物腰も、ひどくひかえ目な人だった。苦しい境遇をへて来た人には、よくそんなタイプがあるものだが、——
「戸島さんを、よく御存知ですの？」
「よく知らないから、聞いているんだ。」
それはそうだろう。
しかし、その人について聞くということは、その人に対してそれだけの関心があるということだ。少くとも、関心を持つだけは知っているということにならないか。
——おかしい。
と、思った。
売場の女たちの中には、青沼に対して関心を抱いている人は多かった。なんとなく、女の目を惹く男なのだ。が、青沼の方で関心を抱いている人が、店の中に

いようとは思っても見なかった。
「さっき……といっても僕が会社を出てすぐだから、五時ごろだが、あの人に偶然、会ったんだ。そしたら、お茶を飲もうという。」
「え？」
佐織は、あっけにとられた顔になった。そんなことを、自分の方から言い出せる人とは思えない。
「時々、御一緒ですの？」
「いや、時々誘われる。尤も、誘いに応じたのは今日がはじめてだが……。」
——きたならしいわ。
と、彼女は思った。
誘われてお茶をのみ、別れるとすぐ、ひとを食事に誘う。不潔な気がした。失望が来た。すると急に、別れてしまいたくなった。
「あの人、結婚に破れた人なんだって……？」
「誰がそんなことを……？」
「自分で言うんだ。」
「……。」
「なぜ、そんなことを僕に言うんだろう。」
「そのお話がなさりたくて……。」
と、佐織は少しずつ立ち直りながら言った。
「それで青沼さんは、いまあたしと歩いていらっしゃるの？」
青沼に声をかけたのは、あの、妙な顔を見たからだった。それを見ると、ふと心の騒ぎ立った佐織だ。
——通りすがりの人だって、急に病気になって苦しみ出すのを見れば、看病するわ。
と、彼女は胸の内で呟いた。
あるいはそれは、今日までは想像もしなかった近さにひき寄せてしまった相手を、また適当な距離までひき放そうとしていることになるかもしれない。手を貸す必要のない人に、手を貸そうとした時の羞恥があった。羞恥は、たちまち腹立たしさを呼ぶようだった。尤もそれは、相手に対する腹立たしさではない。自分がさし出がましかったと気づいた時の、自分自身への腹立たしさであった。
「君は、変なことを言うね。妙なからみ方をするね。」
いくらか当惑するように、青沼が言った。
「あの人のことを、君に聞いたら悪いかい？」

「いいえ、それはかまいません。ただし、それにお答えするには、あたしは適任者じゃないと思うんです。」
「なぜ？」
「同じ売場の人です。親切な、先輩です。あたしはどうしたって、あの方の肩を持ちますわ。」

翌日、店の売場で顔を合せると、戸島雪枝はいつもと同じようだった。

性格が性格だし、年もいっている。たとえいくらかのあせりがあるとしても、勇敢に、男を誘う人とは見えない。

——あの話は、青沼さんの作り話だったのではないか。全部が作り話ではないまでも、どこかに事実を歪曲したところがあったのではないか。

——もし事実だったなら……。

佐織には、自分の気持がその人から離れそうな怖れがある。

「今夜、大丈夫ね。」

まだ、人影の少い店内を見渡しながら、雪枝は佐織に言った。

「ええ。」

と答えたが、余りはっきりした返事には、なっていなかったかもしれない。

クリスマスだから、一緒に食事をしよう、——そういう約束は、十日も前から出来ていた。

どちらも独りぐらしだった。佐織は知人の紹介で、大きな家のひと間を借りていたし、雪枝は古いアパートに、一室を持っている。どちらも肌寒い境遇だった。同じ売場にいるそういう二人が、次第に接近してゆくのは、あるいは当然だったかもしれない。

「久しぶりに、御馳走を食べましょうね。」
「七面鳥を……？」
「そう。でも、二十四、五日は混むわよ、どこでも……。二日か三日、前にしましょうか。」
「余り賑かで、酔っぱらいなんかいたら困るから……。」

それで、簡単に約束は出来た。

雪枝が、銀座のレストランの卓子（テーブル）を予約してくれた。そしてその日の来ることを、二人とも楽しみにしていたのだが。

——あるいは一緒に食事をしている内に、青沼の話が出るのではないか。
と、佐織は思った。
昨日までの佐織なら、なんの話が出ても平気だった。喜んで、話を合せただろう。今日も、ほかの話題ならばちっとも問題はない。が、あの男の話だけには、触れたくない。
昨夜、その人と一緒に歩きながら、
——きたならしいわ。
と思った時の、不快な動揺がよみがえって来た。折角楽しい食事をしながら、不愉快な思いはしたくない。
彼女は売場に立ちながら、いつもより口数が少くなっただろうか。
客が見たままに抛り出して行った本を、もとの書棚に納める時、彼女は自分でもそれを開いて見るのだった。本に顔を伏せている。それだけで、仲間たちと顔を合せずにいられたから。口をきく機会を、少くすることが出来たから。
しかし夕方が近づくにつれて、彼女は妙に波立ちはじめるのだった。気の進まない場所へ、ひき出される時のような、心の重さだった。その場所へ出てゆけば、何かいやな思いをしなければならない、そういう予感が、次第に濃くなるようである。
四時になった。
——もうすぐだわ。
銀座のレストランの、はなやかな明るさは目にうかばず、心が漸くかげるようである。
「佐倉さん、お電話よ。」
キャッシャーのそばから、一人の女店員が呼んでいた。
「あら、あたしに……?」
佐織は急いで、ふり返った。滅多に、電話のかかることはない。かかってきそうな、心あてもなかった。
——珍しいことだわ。
と思いながら、ふと、「あの顔」を目に泛べたのは、昨夜、いくらか気まずい別れをしたからだろうか。しかし、
——あの人なら、出たくないわ。
客に応対している雪枝の方をちらと見て、電話機を

とると低い声になった。
「もしもし……。」
「あ、佐織さん？」
「はい。」
彼女には、相手がすぐに分った。
彼女の苗字を言わず、名前で呼ぶ人は幾人もいない。
「別宮よ。」
「ええ、分りました。」
声が、思わずはずみそうだった。が、相手の声が狼狽を含んでいると気づくと、
「小母さん、どうかなすって……？」
「それがね、別宮が怪我をして……。」
「え？　どうして、また……。」
今度は声が、高くなった。
「工場で、怪我を……。あたし、これからすぐ出掛けたいんだけど、来て頂けない？」
「伺います。」
と言った。
雪枝との約束は、たちまち遠くなっていた。

「お隣りの奥さんに、子供をたのんで行きます。来る時、ちょっとお隣りへ寄って……。」
「はい。」
電話を切ると、足がふるえていた。
――思いがけない不幸が、落ちて来ている。
それは別宮一家の不幸でもあるし、佐織にとっても不幸だった。その人だけは、佐織が心をあけ放して話の出来る人だったから。
「戸島さん、すみませんけど……。」
佐織はいくらか、ふるえる声で言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com